みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

展示場とウェブ空間とのはざまで考える：基幹研究：中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-04-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 横山, 廣子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009032

PROJECT

展示場とウェブ空間とのはざまで考える

文
横山廣子

基幹研究 ● 中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築（2016－2017年度）

中国展示場入り口左手の展示（2016年6月、横山廣子撮影）。

プロジェクトの目的と特徴

プロジェクトは、2014年3月にリニューアルした「中国地域の文化」展示場（以下、中国展示場）の展示資料を対象とし、日中英3言語のデータベースを作成して発信し、国際的な共同利用を促進しようとするものである。2015年度の中国展示場の部分改修完了後、2016年度と本年度の2ヵ年の強化型プロジェクトとして立案した。

民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトは、現在、すでに終了したもの、進行中のものを含めて14件のプロジェクトがある。そのうち、映像音響資料を対象とするものが1件あるが、13件は基本的に標本資料を対象としている。また、標本資料を対象とするデータベース化のうち、11件は収蔵する標本資料のなかで、ある特定の範囲を設定して実施するもので、残りの2件だけが展示資料を対象としている。

展示場の展示を可能な限り反映した形でウェブ発信することを強く意識している点に、本プロジェクトの特徴がある。発足時点では同種の先行例はなく、収蔵庫にある標本資料を対象にデータベースを構築する場合との違いについて細部にわたる理解がなかった。プロジェクトの進展とともに、展示場とウェブ空間との違いに発する課題や留意点に気づき、対応を重ねていくことになった。

展示場見取り図からのデータへのアクセス

中国展示場には1,070 点近くの標本資料が展示されている。リニューアル・オープン時の展示資料の全ては、他の展示場と同様に、本館企画課がエクセルファイルに整理して記録を残している。これは、いわば資料台帳と言える。そのため当初は、すでに展示資料のリストはある、それをウェブ発信すればよいわけだ、と簡単に考えていた。しかし、リストを改めて眺め、資料をどのようにウェブ空間に載せるかを具体的に描いてみると、検討すべき点が浮かび上がってきた。

従来、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトで製作してきたデータベースは、私たちのプロジェクトが目指すものより、ずっと純然たる意味でデータベースであった。つまり、いずれも冒頭に検索画面があり、資料名や民族名で検索して個々のデータベースにアクセスするよう設計されている。

しかし、展示場で来館者が出会うのは、セクションごとに分かれた展示である。展示場を反映したデータベースでも、さまざまな検索が可能なのは勿論だが、まずはセクションに分かれた展示場の見取り図経由で展示資料を見ていくアクセスが確保されるべきであると私たちは判断した。そしてセクションごとに資料が配列される画面の冒頭には、展示場にあるセクション解説なども配置することにした。

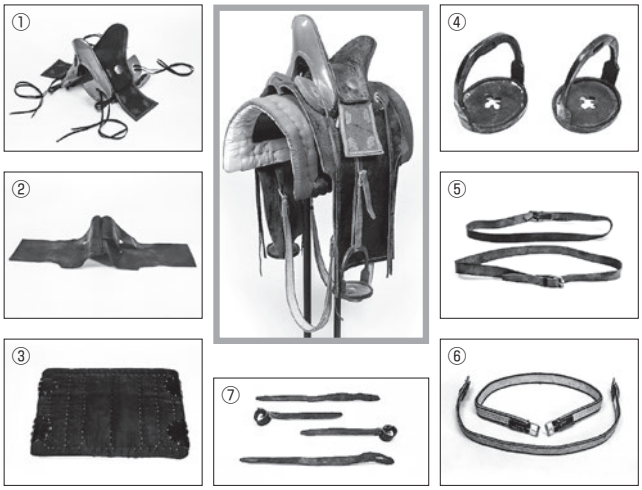
展示場見取り図は、解説シートなどに「生業」、「民族楽器」、「チワン族の高床式住居」、「装い」、「工芸」、「台湾原住民族」、「宗教と文字」、「華僑・華人」、「継承される伝統中国」の展示場の9セクションの図が示されていて、その準備はできていると考えていた。だが実際に展示構成の細部を見ていくと、いずれのセクションにも属さない部分があることに気づいた。入り口のすぐ右手に展示への導入の意味を持たせて配置した民族分布図、代表的な民族衣装、中国56民族の記念切手シートで構成されるコーナー、そしてタッチパネルのMinpaku Anthropological Phototheque (MAP)である。展示場内の空間では、展示品はそこにあるだけで何らかの意味と存在感を有し、どの空間に属するかが曖昧であっても大きな問題にはならない。だが、ウェブ空間は、そういうわけにはいかない。そこで、9セクションのほかに「イントロダクション」という空間を新たにウェブ用見取り図に加え、上記の部分を全体解説などとともにそこに配置した。

セクションの下位区分

中国展示の多くのセクションは、さらにサブ・セクションやコーナーに分けられ、展示内容が整理されている。しかし、展示スペースが最も狭い「民族楽器」のセクションは下位区分せず、同種類の楽器を近接させて並べて、まとまりをつけている。また「チワン族の高床式住居」のセクションは、コンテクスト性が豊かな「家屋構造」のなかに展示されるため、資料はおのずと部屋ごとに整理され、下位区分がなかった。

そもそも展示場という三次元空間は立体的であり、変化に富んでいる。並べられる位置や演示法により、なんらかの括りや分類が発生し、下位区分を言葉によって明示的に導入しなくても、来館者にわかりやすく展示品を配列できる余地がある。しかし、資料の配列が単純かつ画一的なウェブ空間では、「民族楽器」や「チワン族の高床式住居」のセクションには新たに下位区分を導入し、他のセクションでは従来からの下位区分を活用し、全てのセクションにウェブ用の細分類を設けることにした。また、このウェブ分類に基づいて全体を再整理する過程において、展示位置の記録を重視して作成された資料台帳とは一部異なる資料の並び順を、ウェブ用に調整する必要性にも気づいた。位置の記録を優先させたリストでは、時に資料の意味上のまとまりが反映できていない場合があり、三次元空間である展示場

7 標本資料 ⇒ 1 展示単位



個別に登録された7点の標本資料からなるモンゴル族の馬用の鞍一式。

から二次元のウェブ空間へと場を移す際に、ウェブ用の単線的配列に合わせる配慮が必要であった。

「展示単位」の導入

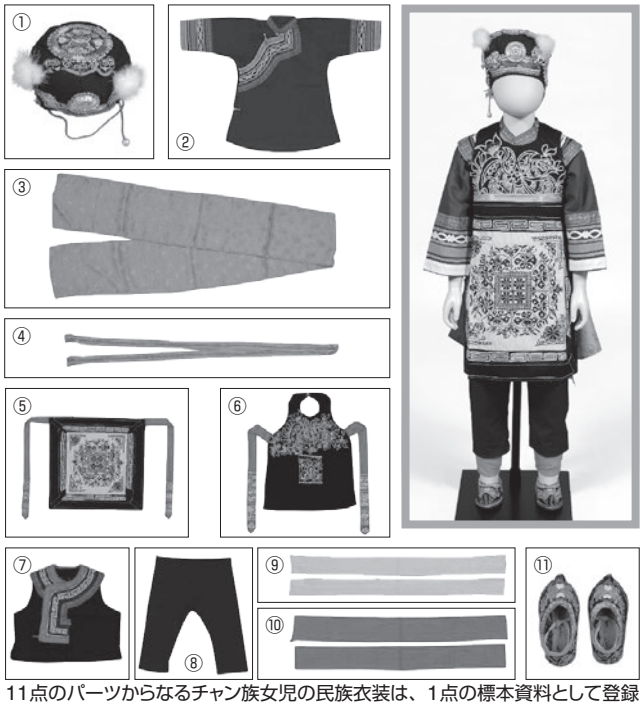
展示資料の多くは、それぞれが1点ずつ標本資料として登録されている。しかし、標本資料が複数集まって1つのセットとして展示される場合も少なくない。たとえば「生業」のセクションにある鞍は、馬の背にそのまま載せて使えるように組まれた形で「馬用鞍一式」というキャプションとともに展示されている。この展示は、標本資料単位でみれば、鞍本体のほか、鐙や腹帯など7、8点の標本資料からなる。展示場での資料の見え方をウェブ上でも確保するにはどうしたらよいかという課題に対して、私たちのデータベースでは「展示単位」という枠組みを導入し、展示単位の下に当該展示単位を構成する標本資料のデータを位置づけることにした。

標本資料は、民博でその登録が行われる過程で1点ごとに写真が撮影されるが、複数の標本資料からなるセットの写真は、撮影されていない場合も多い。ウェブ空間では全てに画像が不可欠なため、本プロジェクトでは必要に応じて、新たに展示単位ごとの撮影を行った。

展示単位の導入は、展示場とウェブ空間のはざまで発見したもう1つの問題、つまり民族衣装の標本資料登録の不統一という問題も一挙に解決した。1980年代前半に購入した中国の民族衣装は、上衣、下衣、靴など多数のパーツからなる衣装のセット全体に1つの標本資料番号をつけ、各パーツには、標本資料番号の下位区分としての枝番号をつけて登録していた。しかし、その後、セットで衣装を購入しても、パーツごとに標本資料番号をつけて登録するようになった。

リニューアル後の中国展示の衣装は、着用している人々の生きた姿を浮かび上がらせるという基本構想に基づき、大多数は、頭から足元まで身につけているもの全てをマネキンに着用させて展示している。そのような衣装一式を、標本資料単位でウェブ上に並べると、マネキン着用の全体像が見えにくくなると同時に、登録単位の不統一が表出してしまう。標本資料としての登録の如何にかかわらず、1体のマネキンが着用する民族衣装一式を1つの「展示単位」とすることで、この問題が解決した。

1 標本資料(11点のパーツ) ⇒ 1 展示単位



11点のパーツからなるチャン族女児の民族衣装は、1点の標本資料として登録されている。

物理的空間に縛られないウェブ空間展示の可能性

中国展示場では、一部の展示でスペース不足を写真で補う手法が用いられた。「工芸」セクションの農民画や社会主義ポスター、「継承される伝統中国」セクションの版画は、一部のみ実物の資料を展示し、その他は民博収蔵資料の写真を印刷し、アルバム形式で展示している。これら展示場で実物が展示されていない資料も、ウェブ空間では、実物が展示されている資料と区別なく、全て1点ずつの資料を画像でじっくりと見せることができるようになった。また「宗教と文字」のセクションでは、ペー族の祖先の位牌を収納する家型厨子は、標本資料のサイズが大きすぎるため、代わりに現地写真が展示されている。ウェブ空間では、現地写真に加え、民博収蔵の家型厨子のさまざまな角度からの写真を追加することで、木彫資料の細部も提示可能となった。

さらに、中国展示場では、資料の用いられるコンテクストを示すために、一部の資料には現地写真が添えられている。ウェブ空間は物理的空間に縛られないために、現時点で可能な範囲で現地写真のさらなる追加も行った。

以上が展示資料をデータベース化する過程で遭遇した課題とそれへの対応である。本プロジェクトでも、データベースのさらなる充実に向けて、データベースにアクセスした人々による書き込みが可能なシステムが構築されることになる。最後に、書き込み以後の対応という、全てのフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトに共通する大きな課題が残されていることを指摘して、筆をおくことにする。

よこやま　ひろこ

国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授。専門は文化人類学。中国雲南省のペー族を中心に調査研究に従事。論文に「中国において『民族』概念が創りだしたもの」端信行編『民族の二〇世紀』(ドメス出版 2004年)、編著に『少数民族の文化と社会の動態―東アジアからの視点』(国立民族学博物館調査報告50)など。